

出土遺物には土師器、陶磁器、瓦があり、総計一三五点を数える。遺物は両掘削坑から出土しているが、北側部分からの陶磁器の出土量は少ない（第31図）。

土師器（1～5） いずれも乳白色を呈し、皿と思われる。径二〇センチを越す大型の製品（1）と、一〇センチ前後の製品がある。後者には口縁部付近を肥厚させるもの（2・3）と、体部が蛇行するもの（4・5）がある。底部と体部の境には、淡い沈線をもつものが多い。

陶器（6～8） 6は底部外面を除き、黄緑色に施釉した花形皿である。貫入が著しい。7は灰釉碗で、口縁部外面の釉になだれが認められる。8は丸腰の碗か。外面にのみ黒く施釉している。図示したものの他にも、備前焼摺鉢、灰釉碗（檜崎彰一氏の御教示によれば虎溪山Ⅰ式）の小片などがある。

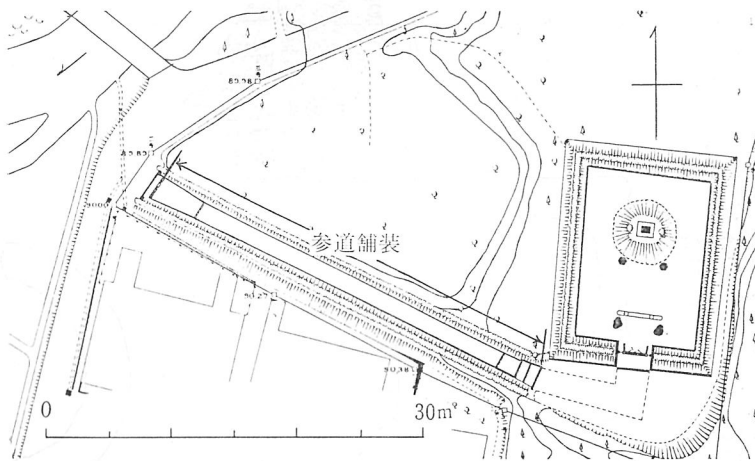
磁器（9） 薄手の白磁の端反の碗である。他に伊万里産のものが多く認められる。

瓦（10～12） 鎧瓦、棟込瓦各一点の他は、平瓦、丸瓦である。平瓦一点を除き、全面を黒く燻している。鎧瓦（11）は、右に巻き込むバを有し、尾は細く長い。外区には、大振りの珠文を配している。丸瓦には、凹面に布目をとどめているものもある。12はその後、幅約一・五センチの工具で器表を削り取っている。10は一六弁菊花文棟込瓦。花卉は狭長で中央が凹み、周縁はない。瓦当部裏面は横位の撫での後、周辺に沿ってさらに撫でている。

（福尾正彦）

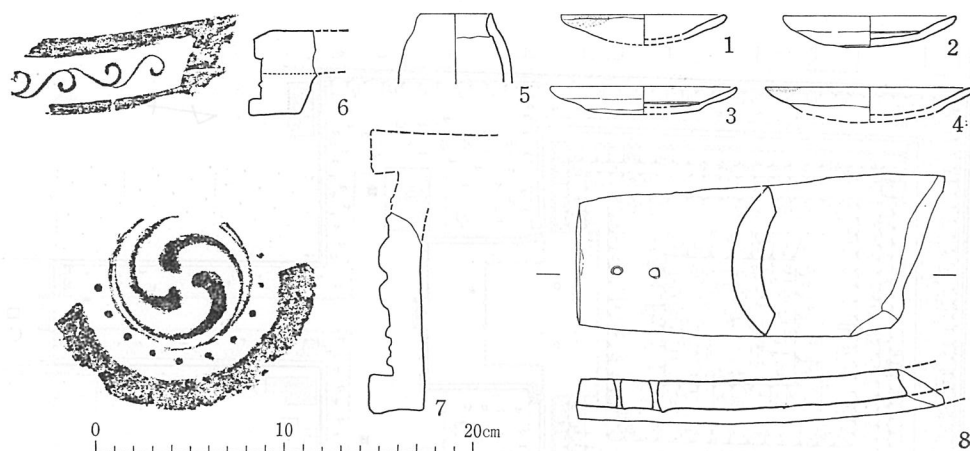
智成親王墓参道石張工事箇所調査

智成親王墓（第22図）の参道を、板石敷に舗装することになった。わずか〇・二メートルの掘削であるが、当地は以前から布目瓦が散布しているので、昭和五十九年三月十二日から十九日にわたって立会調査を実施した（第32図）。



第32図 智成親王墓調査箇所位置 (1/600)

地層は、掘削が浅いため茶褐色砂質層のみで、布目瓦や現代の瓦などが混在していた（第33図6～8）。そこで下方の状況を検討するため、一〇・五メートルの範囲をさらに掘削した所、一〇センチ



第33図 智成親王墓の出土品 (1/4)

チ程で黒っぽい砂質層に変化した。しかし、この層は二〇センチ程で再び茶褐色砂質層になったので、掘削を止めた。この中間の層は、近世の小皿をはじめ、他層よりは遺物の包含量が多い(第33図1~5)。黒っぽい色調から旧表土と思われる。遺物には、土師器・陶器・瓦・釘があり、計一六七点が出土している。

土師器(第33図1~5) 1~4は燈明皿で、口縁部に煤の付着しているものもある。5は、すばまった口縁内部に折り返しを有す

るもので、蛸壺、塩壺などの可能性が考えられる。

瓦(第33図6~8) 6は瓦当文様が唐草文の宇瓦で、瓦当面中央に接合痕がある。鑑瓦(7)は瓦当文様が右巴文で、外区に珠文をめぐらす。8は折損した方が幅広くなり、反りを有するもので、二個の釘穴を穿つ。鳥簏の一部であろうか。あるいは、軒反りのある屋根の、棟に接する位置に葺かれた鑑瓦の一部かもしれない。(土生田純之)

紙屋上陵排水管改修工事箇所調査

花山天皇の紙屋上陵(第25図)の域内に、京都市水道局の実施している下水道改善工事に付随して在来排水管を接続することとなったので、昭和五十九年三月十五日に立会調査を実施した。掘削は、見張所脇(A)および参道入口部分(C)の排水樹設置箇所各一箇所、前者に伴う排水管理設溝(B)一箇所を〇・五~一・二メートル行なった(第34図)。

表土下には、攪乱層(A・B)もしくは盛土層(C)が認められた。遺物は、B地点の地表下六〇~七〇センチから集中して出土した。近年の廃棄物をまとめて処理したような状態を示していた。工事は予定通り施工した。(清水孝平)

出土した遺物は総計一五八点を数える。土師器、陶磁器の破片を主とし、瓦質土器、瓦、化粧品の空瓶、腐食した包丁、櫛などが含まれていた(第35図)。